

一

次の各問いに答えなさい。

問一 次の各文の——線部のカタカナを漢字に、漢字をひらがなに直しなさい。

- 1 ネンシヨウによって炎があがる。
- 2 号令のフエが鳴る。
- 3 カガミの前で身だしなみを整える。
- 4 ルミナリエのテントウ式に参加する。
- 5 昔の出来事を追想する。
- 6 時計が時を刻む。
- 7 舞台の暗幕がおろされる。
- 8 木々が青々と枝葉を茂らす。

問二 次の1～5の二字熟語について、その対義語となる二字熟語をあとの語群の漢字を使って完成させて答えなさい。

- 1 敵対
- 2 故意
- 3 中心
- 4 拡大
- 5 自然

語群

少	過	人
失	縮	友
細	太	小
顔	口	好
周	工	辺

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

はじめのうち砂糖は、アジアで採れる香料と同じく貴重品でしたが、香料とはちがってヨーロッパ人自身の手によって、プランテーションで栽培されるようになり、その生産量がしだいに増やされていきました。

たのです。というより、砂糖はだれもが好きで、ほとんど無限に「市場」がありましたから、この高級食品がプランテーションで大量に「栽培」、つまり「生産」できるものであることがわかってくると、ポルトガルを先頭にヨーロッパ諸国は、競ってその生産を組織しようとしたのです。こうして、砂糖は、たんに薬品や一部の貴族のみのぜいたく品ではなくなっていったのです。

b、こうなると、大西洋の島々はあまりにも手狭てせまでした。したがって、ヨーロッパ各国は、どこかに新しい、広大な砂糖きびの栽培地を求めたのです。コロンブスが西半球に向かった、その第二回目の航海に、砂糖きびの苗なえを携たずえていったのは、このような事情からでした。

a 砂糖きびは、こうして新世界にもたらされましたが、コロンブスの新世界「発見」（一四九二年）やヴァスコ・ダ・ガマのインドへの航海（一四九八年）以後、アメリカ大陸とアジアとアフリカとヨーロッパとのあいだを、新しい動物や植物の品種が活発に移動しました。その多くは、薬や原材料、食糧しょくりょう、カンシヨウ用などに、わざと人間が持っていったり、持ち帰ったりしたものです。

砂糖きびもそうですし、ヨーロッパ人の主食のような地位を占めるようになり、その食生活を変えてしまうことになるジャガイモや、トウモロコシ、トマト、タバコなどはアメリカからきたものです。茶は、樹木そのものは移植が困難しんなんでしたが、収穫しゅうかくされたその葉わっぱがアジアから渡わたってきました。タピオカの原料として、いまでもアフリカで主要な食品となっているキャサヴァは、ブラジルからポルトガル人によって、アフリカのコンゴに移植されたものでした。エチオピアが原産地げんちだったコーヒーも、こうした長い長い旅の末に、インドネシアのジャワや南アメリカのブラジルやコロンビアにたどりつき、プランテーションでつくられるようになりました。成功はしませんでした。イギリスが太平洋のタヒチ島②に原生せいせいしていた「パンの木」*2を、カリブ海に移して、奴隷どれいの食用にしようとした話もよく知られています。

薬品も、食糧も、建築資材も、燃料も、ほとんどすべてのものが動物か植物のいずれかを素材としていた時代ですから、金や銀に次いで、動植物、とくに植物が重要と考えられ、人びとは、つねに何か新しい「有用な植物」はないか、ということに気をかけていたのです。一七世紀はじめのイギリスの大法官（いまの法務大臣）であったフランシス・ベイコンといえは、科学者としてもよく知られた人でしたが、同時に、ヴァージニアへの植民を

行なった会社の出資者でもありません。このベイコンは、彼の『随筆集』のなかで、新しい土地に行ったら、必ずこういうものをさがすように勧めています。

大洋を越えてヨーロッパ人が世界各地に出かけるようになったのも、キリスト教をひろめるとか、ヨーロッパ産の毛織物売るためというよりは、この目的のためであったといえましょう。新しい土地でみつけた「有用な植物」は、砂糖きびの例がよく示しているように、本国に持って帰ったり、もっとキコウや土地の条件や労働力の具合のよい場所に移しかえることが必要になりました。

このような必要から、ヨーロッパの各国は、本国にも植民地にも、競って植物園をつくり、研究をすすめました。一七世紀末、オランダ人がアフリカ南端のケイプ（喜望峰）植民地につくったものが、このような植民地植物園のはじめといわれていますが、ずっとのちになると、イギリス人もセント・ヴィンセント、ジャマイカなどカリブ海の島々や、カルカッタ、ペナンなどアジア各地にこうした植物園をつくり、ロンドンのキュー・ガーデンズ植物園を中心にした植物園ネットワークをつくりあげました。

c、逆に、ヨーロッパからアメリカに移された動物や植物も少なくありません。なかでも、もっとも重要なものが馬でした。その意味では、西部劇の世界は、まさしく「コロンブスの交換」なしにはありえなかったのです。

もっとも、同じようにこの時期に大陸間を移動したのものには、偶然、人間に付いて移動したものもあります。たとえば、アメリカ大陸からきた梅毒や、ヨーロッパからアメリカ大陸に移ったインフルエンザのような病気なども、その一例です。ヨーロッパ人の持ち込んだ伝染病が、カリブ海の先住民カリベ族など、「インディオ」たちの激減の原因だといわれています。

いずれにせよ、コロンブス以後、これまで知られていなかったものが、アジア、アフリカ、南北アメリカとヨーロッパのあいだで、相互にひろがり、いろいろな意味で世界が **X** したのです。

（川北稔『砂糖の世界史』より）

*1 プランテーション 一つの作物を大量に栽培する大規模農園。

*2 パンの木 クワ科の常緑植物。名前の由来は、熟した実を調理すると焼きたてのパンのような食感がすることから。

問四 — 部B「わざと人間が持っていたり、持ち帰ったりしたもの」とありますが、「わざと持っていたり、持ち帰ったりしたもの」として適切でないものをあとのア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア トマト
- イ パンの木
- ウ 馬
- エ インフルエンザ

問五 — 部C「こういうものをさがすように勧めています」とありますが、なぜさがすように勧めていたのですか。その理由を説明したものととして最も適切なものを、あとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 砂糖きびで大もうけしたフランスス・ベイコンは、同じような植物でさらに商売をしようと思っていたから。
- イ 薬品や食品、資材ですら動植物に頼っていた時代であったため、とにかく「有用な植物」を必要としていたから。
- ウ 世界中の植物を集めて、植物園ネットワークを作り上げることで植物の保護をしたいと考えていたから。
- エ イギリスでは食糧危機が広がり、フランスス・ベイコンは新たに食べることでできる植物を探していたから。

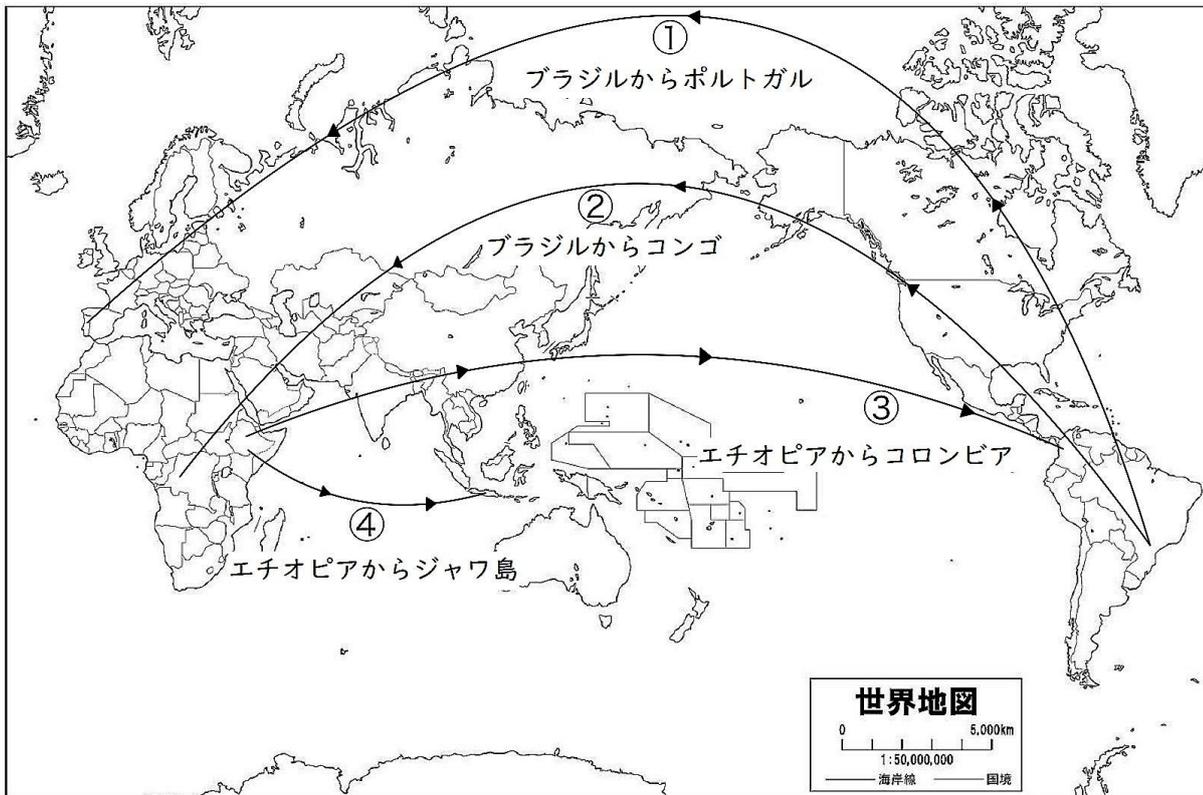
問六 — 部D「砂糖きび」とありますが、砂糖きびをはじめ、多くの新しい食糧がヨーロッパにもたらされたことによって、どのようなことが引き起こされましたか。次の□に合うことは本文中より十字で抜き出して答えなさい。

十字

問七 本文中□Xにあてはまる語句として最も適切なものを、あとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 縮小化
- イ 巨大化
- ウ 一体化
- エ 分断化

問八 次の地図上における①～④の矢印は、本文中X「キャサヴァ」・Y「コーヒー」の移動を表わしたものである。本文に書かれている「コーヒー」、
「キャサヴァ」のどちらの移動にもあてはまらないものを①～④から一つ選んで記号で答えなさい。



問九 本文の内容を説明したものととして最も適切なものを、あとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 砂糖は高価なため、誰もが購入することができないのではなく、二一世紀になっても手にすることが出来る人は限られていた。
- イ 奴隷の食用として利用が考えられていた。パンの木は、味も風味も良いので貴族の食品として使われることになった。
- ウ ヨーロッパ諸国の大洋を越える移動は、キリスト教を世界に広めることが最も重要なたった一つの目的であった。
- エ ヨーロッパ諸国の大洋を越える移動は、動植物だけでなく持ち帰るつもりもなかった予期しないものを持ち帰ることもあった。

三

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

臨時教師で声を出せない吉岡誠吾は、慌てて呼びに来た生徒について行くと女性が男たちから襲われているところだった。誠吾は女性たちを助けるが、その後男たちは誠吾に対して殴りかかる。しかし誠吾は決して手をださず、子供たちが見守るなか一方的に殴られるという出来事があった。本文はその翌日の朝から始まる場面である。

誠吾が教室に入ると、生徒たちはそろそろらしい顔で誠吾を見ていた。

周一郎は生徒たちの反応を見て苦りきった顔になった。

朝の挨拶も校歌を合唱する声も冷たく聞こえた。誠吾の顔も沈んだように元気がなく映った。

授業がはじまっても昨日までの誠吾に甘えるような生徒たちの態度は失せていた。

神社で起こった事の成り行きは妙子から一部始終を帰りの連絡船の中で聞いていた。

——吉岡先生はよく辛抱してくれた。

話を聞いて周一郎は誠吾の意志の強さに感謝をした。

しかし吉岡先生の行動をどうやって生徒たちに理解させたらよいものか、周一郎には良策が見つからなかった。

「葉名島のことをあんなに馬鹿にされたのに先生はただ殴られてばかりだった」

くやし涙をためて周一郎に説明していた妙子の顔を思い出して、島の人間が浦津の人間に対して抱いている特別な感情が子供たちにもあるのだろうと思った。

諸岡の息子との剣道の稽古を目の当たりに見ている周一郎には誠吾の強さがわかる。それをどうやって生徒たちに伝えたらいいのだろうか。

放課後、周一郎はハナコの小屋の前でほんやりと豆狸の子たちの様子を見ていた。

「校長先生、郵便屋さんが来てます」

妙子が雑巾を片手に報せてきた。

教務室の前に郵便夫が立っていた。

「電報です」

「ごくろうさんです」

発信先を見ると、浦津の教育委員会からだった。

——シンニンキヨウシ キマツタ レンラクコウ

電報の文字を読んで、^B周一郎はため息をこぼした。

「校長先生、何ですか」

妙子が聞いた。

「何でもありません」

周一郎は電報をポケットに入れるととぼとぼ校長室の方へ戻って行った。

誠吾が生徒たちの作文を読んでいた。

「吉岡先生、少しつき合ってもらえますか」

周一郎は誠吾に笑いかけた。顔の左半分がざくろのように腫れ上がった誠吾が白い歯を見せた。^②

二人は小学校の裏手から来目山の東側の山径を歩いていた。

「阿部先生が驚いていたでしょう。吉岡先生の顔を見て」

誠吾は笑いながら頭を掻いた。

「葉名島はどうですか」

誠吾は嬉しそうに二度、三度うなずいた。

「そうですか、それは良かった。こんなちいさな島でも厄介なことは多いもんです。先生が嫌になら^③れるんじゃないかと、私心配してるんです」

誠吾が立ち止まって、ひとさし指で自分の胸をさしてから島全体を両手でつつむようにし、子供たちの頭を撫でる仕種をしてから、喉のあたりで親指とひとさし指を開いてつまむように前にのばして、

——私はこの島も子供たちも大好きです。

と手話で周一郎に話した。

「そうですか、先生は、島も、子供たちも、^C大好きですか。そりゃよかった」

と周一郎が覚えた手話を思い出しながら言い直した。誠吾がおおきくうなずいた。そうして胸の前で左手の甲^{こう}へ相撲^{すもう}の手刀^{てがたな}のように右手を一回ぼんと当てて跳ね^は上げ、周一郎に X の仕種をした。

「いいえ、感謝しているのは私の方です。先生が見えて下さってから生徒たちが明るくなりました。私も生徒もあなたからいろんなことを教えてもらっています。あの子たちが大人になった時にきっと先生に教えてもらったことのおおきさがわかるはずですよ」

周一郎は歩きながら、

「私はできれば先生にずっとこの島にいてもらいたいです。私も生徒たちももっともって先生と^{いっしょ}一緒にいて、いろんなことを教わりたいと思っています」

と熱^④っぽく話した。

やがて灯台が見えて、彼方^{かなた}に白波を立てる海がひろがった。

(伊集院静『機関車先生』より)

問一 ―― 部①～④の本文中の意味として適切なものを、それぞれあとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

① 目の当たりに

ア 目の前で見る イ 遠くで見る ウ 目を閉じてしまう エ 目を見開いてしまう

② 白い歯を見せた

ア つまらなそうな顔を見せた イ 悲しそうな顔を見せた ウ 怒った顔を見せた エ 笑顔を見せた

③ 厄介な

ア 不可能な イ 簡単な ウ たいくつな エ めんどうな

④ 熱っぽく

ア 熱にうなされるように イ 体調が良さそうに ウ 情熱的に エ 冷静に

問四 — 部B「周一郎はため息をこぼした」とありますが、なぜ周一郎はため息をこぼしたのですか。その説明として最も適切なものをあとのア、エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア ようやく待ち望んでいた新しい先生が正式に赴任することが分かり、安心した気持ちになったから。
- イ 子供たちに誤解されているなか、吉岡先生の任期が終わってしまうことが分かり、どうすれば良いか悩んでいるから。
- ウ 臨時の教員である吉岡先生が学校をさっしてしまう時期が分かり、次の新しい先生こそは長い間勤めてもらおうと決心したから。
- エ 厳しく子供たちに接してくれる吉岡先生は、なくてはならない存在なのに、いなくなってしまうことが分かり残念に思ったから。

問五 — 部C「大好き」とありますが、「大好き」はどのような手話ですか。次の空白に合うように本文中より三十字以内でぬきだして答えなさい。

三十字以内

表現する手話。

問六 本文中 X にあてはまる語句として最も適切なものを、あとのア、エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア さようなら
- イ ごめんなさい
- ウ ありがとう
- エ こんにちは

問七 本文中「**れ**」と同じ用法の「**れ**」を使って、短文を作りなさい。ただし、解答には主語と述語を必ず書きなさい。

問八 本文の内容や特徴を説明したものとして、適切でないものをあとのア～エから一つ選んで記号で答えなさい。

- ア 他の生徒たちとは違って、妙子は誠吾の行動について良く理解しており、誠吾と生徒たちの間にたてる人物である。
- イ 誠吾が言葉を発することはないが、彼の表情や手話によって読者は誠吾について理解を深められる文章となっている。
- ウ 周一郎は校長先生として、よく生徒たちの様子を観察し、その変化に気づくことができ、また誠吾のこともよく理解している。
- エ 本文では——（ダッシュ記号）により音にならない言葉を表現し、手話による誠吾の言葉もダッシュ記号によって表わしている。

問題はこれで終わりです。

